ぶっちゃけインタビュー 19

伊藤亜紗さん（いとう・あさ）
東京工業大学
リベラルアーツ研究教育院准教授

見えるから見えない世界 見えないから見える世界

里見喜久夫（『コトノネ』編集部）＝インタビュー
interview by Kikuo Satomi
岸本 剛＝写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

世界を五感で認識するのに、一つでも機能しなければどうなるのか。しかも、視覚情報が八割以上を占めると言われるいまの社会。目が見えないことは、世界をなくすことに等しいのでは、と思ってしまう。しかし、目が見えなくても、世界は見えている。目の見える人と違う世界も広がっている。

昆虫の多様性の不思議

―ご専門は美学ですね。見えない人の世界とはどうつながるんですか。アール・ブリュット（※1）から興味が発展したのですか。

そうではないです。そもそもわたしのような研究は、美学として正統派ではないと思います。

美学は、感覚、身体、芸術を言葉で研究する、哲学の仲間みたいな学問です。ところが、身体を扱う場合に、とても抽象化された人間の身体を前提に研究するんですね。そこに疑問がありました。それは、実態に即してないじゃないかと。

―人間の身体や美に基準はあるのか、ということですか。

そうですね。美学の方法論をとりながら、美学がアプローチしてこなかった多様性にフィットしたような研究をしたいと思ったんです。自分と全然違う身体を持った人を対象に、その人がどんな感性を持って、どのように世界を認識しているのかを知りたいと思ったんです。

―多様性に着目されたのは、何かきっかけが。

美学に進む前は、もともとは昆虫少女でした。昆虫を探して山の中を走り回っていました。生物好きから、生物学を志望して大学にも入ったぐらいです。昆虫を見ていると、自分と全然違う生活をしている。なんか自分と世界を共有しているとは思えなかったんですよ。だから、不思議で、知りたくて。生き物の多様性への興味が、元になったのかもしれませんね。

―昆虫が自分と世界を共有しているなんて、すごい発想ですね。

子どもが、おとぎ話の世界の登場人物に感情移入するような、そんな感覚だったんだと思うんですけど。

―どんな生き物に感情移入を。

いろいろあります。一つ挙げれば、ジグモが好きでした（笑）。根っこのところに袋状の巣をつくるんです、縦長のテントみたいな。クモっていろいろな巣を張る。水平に張る、垂直に張る、袋状のもあるし。巣を張らないクモもいて。つくり方が見当つかない巣もある。こんなところに入っていて、生活が成立するのか、どうやって食べ物を捕まえているんだろう。おもしろくて仕方なかったですね。

―でも、生物学から美学に転向された。

大学に入ってみると、わたしの思っていた学問ではなかった。かなり生物が情報化されていて、すべてDNAに置き換えて考えるようになっていました。生物を捕まえるとそれをすりつぶす。そして、DNAを抽出して塩基配列を読むみたいな感じになっている。捕まえたらすぐすりつぶすっていうその感覚がもう許せない。ショックでした。細胞の仕組みやタンパク質の構造とかよりも、わたしが